

海猿



作：佐藤秀峰 小学館（全12巻）

みなさんは“海上保安官”という職業を知っているだろうか？ 陸上での警察官や消防士と同様に、海上での事故・事件に携わるのが海上保安官である。その海上保安官のありのままの姿を取り上げたのが漫画『海猿』だ。この作品は、あの『ブラックジャックによろしく』で有名な佐藤秀峰による感動のヒューマンドラマで、綿密な取材のもとに海上保安官の真実を伝えている。さらに、人間の感情の複雑な動きを描いた内容と作者の高度な描写力が見事に調和していて、人々の心に感動を与えるすばらしい作品となっている。

『海猿』には巡視船「ながれ」を舞台に、主人公である新人海上保安官の仙崎大輔

が人とのかかわりを通して人間的に成長していく姿が描かれている。

仙崎が遭遇する最初の事故の舞台は密航船。その密航船が火災で沈没寸前という状況の中で、仙崎は船長の命令を無視し、自分の命を危険にさらしてまで密航者を救助しようとする。緊迫した状況の中での先輩航海士池澤の「人は死を前に嘘はつけない」というセリフや、船長勝田の「海上保安官は海で死んではならんのだ」というセリフは、私達に命とは何かということを深く考えさせてくれる。

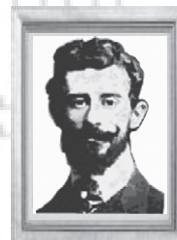
さらにこの漫画を通して実感するのが仲間との熱い友情である。すべての海上保安官の中で1%の人間しかなれない

人命救助のエキスパート“潜水士”。仙崎大輔を含む14名の保安官が2ヶ月にも及ぶ潜水士訓練の中で仲間としての信頼・友情を築き上げていく。2004年6月に公開予定の映画版『海猿』でも取り上げられているこのエピソードは筆者が一番好きなエピソードである。詳しい内容はぜひ実際に読んでみてほしい。

生と死のはざまにおける海をめぐる熱い人間ドラマである『海猿』。読者自身が現場に居合わせているかのように涙することであろう。一度手にとって独特の世界観を味わってみてほしい。本物の感動を味わえること間違いなしである。

(迷い猫)

Mr. J. Ravel (1875-1937)



「クラシックは難しくてなかなか理解できない」。そう思われるかもしれませんが。確かに作曲者の考えを抽象的な音だけで理解するのは難しいけれど、気軽に楽しむには、それを無視したって構わない。専門家の解説が気に入らなくても構わない。私は私の、あなたはあなたの感性で解釈してしまってもいいのです。

ラヴェル (M.J.Ravel) というフランスの作曲家を紹介しましょう。彼はピアノ曲と共に管弦楽曲も作曲して云々…という説明は今ではなしにします。ラヴェルというカテゴリが、どういう感性に包まれたものなのか。それを楽しめるかが重要なものだから。ここではピアノ曲を2つ挙げてみます。

(len&pres)

亡き王女の 為の パヴァーヌ

終始、ゆったりした甘い旋律で、どこか物憂げな表情をみせる。そこから受ける感情は悲しみや切なさだろう。曲名の通り、大事な人を亡くした情景とその喪失感が感じられる。最初に聞いたときは、ほんやりと「離別の悲しさ」を想像していたが、繰り返して聞いていると、段々その奥に潜むものが見えてくる。切なさよりも、愛情に焦点を当てている？ 別れても、なお注がれる愛情。でも、こんな風に想われる相手は幸せだろう。根底にあるものは、その大事な人を想う優しさに違いない。メロディからそれが伝わってくる。あなたにとって大切な人と別れたときに聴いたら、きっと泣けるだろう。

この曲は抽象的な感情ではなく、そのまま幻想的な水の動きがリアルな感覚として湧いてくる。連続する音を聴いていると、水が透明のまま、鮮やかに見える。冷たい水が軽快に動いて、それが見せる優しい表情。弱い音から感じる脆さ。滝の打つ音、川の流れ、雨粒に踊る水溜り。いや、確かに水を感じるのに、自然に存在する水とは違っている気がする。同じなのは繰り返されるテンポ。例えるなら人工の噴水の方が合っている。水飛沫が高く、虹色に跳ねる噴水。現実の水から、理想の水の動き — イメージ — を作り出す。

水の 戯れ

はみだし
すてーじ

愛する人は一人でもいい。恋する人は二人でもいい。好きな人はたくさんがいい。
⇒そうやって私と浮気したのね…。

(工・1 タッキー)
(不倫には辛い思い出がある編)